

有馬〈ありま〉くもの滝〈たき〉（兵庫区有馬町）

それはそれは、遠いむかしのことでした。

湯〈ゆ〉の町有馬〈ありま〉に一人の木こりが住んでいました。その木こりは毎日毎日、明けても暮れても年がら年中湯の山の奥へ行っては木を切り、柴〈しば〉を刈っては町の人に売って暮していました。

ところが、町の近くの山はだんだんと柴も少なくなりましたので、ある日、行ってはいけなといわれている鼓〈つづみ〉が滝〈たき〉の奥へ柴をさがしにのぼっていきました。流れにそって溪流〈けいりゅう〉をしばらく行くと目の前に、水けむりを立て、真白な布が落ちているような美しい滝がありました。

めったに人が行かないのでしょうか、滝のあたりは一面に木がしげり、うっそうとしていました。木こりはすっかりよろこんで、さっそく木を切りたおしたくさんの柴をこしらえました。

やがて昼になったので木こりは滝のそばで弁当を開いて、滝しぶきを身にうけながら食事をしました。それは、ととても暖かい春の日のことでした。春の日ざしをまにうけて食事をし、腹一ぱいになった木こりは、滝つぼに足先をつけながら心地よく、そのままうとうと眠ってしまいました。

どれほどの時刻が過ぎたころだったのでしょうか、滝つぼの中からとつぜん一匹のくもがはい上ってきました。そのくもは、木こりが滝つぼに足を浸しているところへ近づき、口から糸を出し木こりの足へせせと糸を何回も何回も巻きつけ、やがてそのままくもは、滝つぼの中へ姿をかくしてしまいました。心地よさそうに眠っていた木こりは、やがて目をさまし、立ちあがろうとしましたが足が動きません。はて何か足にくっついているとさわってみました。驚いたことに、くもの糸が両足を何回も巻いていました。

「なんだい、いい気持で昼ねをしていたのに。」

木こりは腹立ちげに足に巻きついたくもの糸をほどいて、そばにある大きな木の切り株へひっかけました。

「やれやれ、やっとほどいた。これはうかつに昼ねもできないなあー。」

と木こりがひとりごとをいいながら、くもの糸を巻きつけた切り株を見たときでした。

とつぜん滝つぼの中から大きなくもが頭を持ちあげ、糸をびんとはりました。そして、くもはたくさんの足で糸をたぐりよせ始めました。すると、滝つぼの水は怒涛〈どとう〉のようにさか巻き、くもの糸のかけられた切り株は、ぐんぐんとくもの方へ滝つぼの中へと引きよせられて、とうとう大きな切り株は、滝つぼの中へ姿を消してしまいました。それをじっと見つめていた木こりは、

「足に巻きついたくもの糸をもしほだかなかったら、この私が殺されるころだったのだ。」

と、恐ろしさに肝〈きも〉をつぶして見つめていました。やがて滝つぼはもとの静けさにかえり、大きなくもも姿を消したので木こりは我〈われ〉にかえり、取るものも取りあえず、いちもくさんに家へ逃げて帰りました。

この話は、またたく間に有馬の町に広がりました。そして誰いうとなく、その後はこの滝のことを「くもの滝」とよぶようになりました。

